

私の文房四宝



第六回

辻眞智子先生

(高・大・一般 仮名有級担当)

月刊「書写書道」課題揮毫者が愛用する「筆・墨・硯・硯・紙」について、いつから使用している用具なのか、どのように手に入れたのか、使い心地など、各先生の用具への思い入れを題材に連載しています。今回は、高・大・一般の「仮名有級」ご担当の辻眞智子先生に、硯にまつわる思い出や、愛用している筆のエピソードなどをご紹介いただきます。

硯おりおり (二)

私が自分の母親年代の方々のグループを指導するという機会に恵まれたのは、二十代半ばのことであった。弟子たちは師として接してくれるだけではなく、母が早世していた私を、わが子を慈しむような温かいまなざしで見つめ、大人のたしなみを教え導いてくれた。

若田硯との出会い

その中に故郷(長崎県対馬)の若田石(頁岩。板状に割れる泥岩)の硯が素晴らしいとよく話している方がいた。それまで話には聞いていたが、若田硯を私は写真で見たことすらなかった。その方が帰郷の折、「若田硯を買ってきましようか」と声をかけてくれた。お付き合い程度の軽い気持ちでお願いした硯のだが、一目見るなり息を呑んでしまった。しっくりと五感に馴染

染んでいき、私はすっかり魅せられてしまったのだ。

漆黒の下地に自然石の風合いを生かした硯の蓋の流水の彫りを見てみると、そこから微妙に瀬音(川のせせらぎ)が聞こえ、四季折々に移ろう山河の風景が見えるように感じた(写真1)。また、今回の原稿を書くにあたり裏面に刻された「治人」という名前を調べたところ、「現代の名工」に選ばれた岩坂治人氏の作品であることがわかった。

縁あってこの硯の虜になり、心を通わせながら五十余年。いまだに私を魅了してやまない若田硯は、常時仏間の棚に置き、心の拠り所の一つとして大切にしている。最近は磨墨を楽しんでいる時より、眺めている時間のほうがはるかに長くなってしまった。硯に触れるたび、まだ訪れたことのない美しい硯を生み出してくれている対馬の山河に想いを馳せながら、私は幸福感に浸っている。

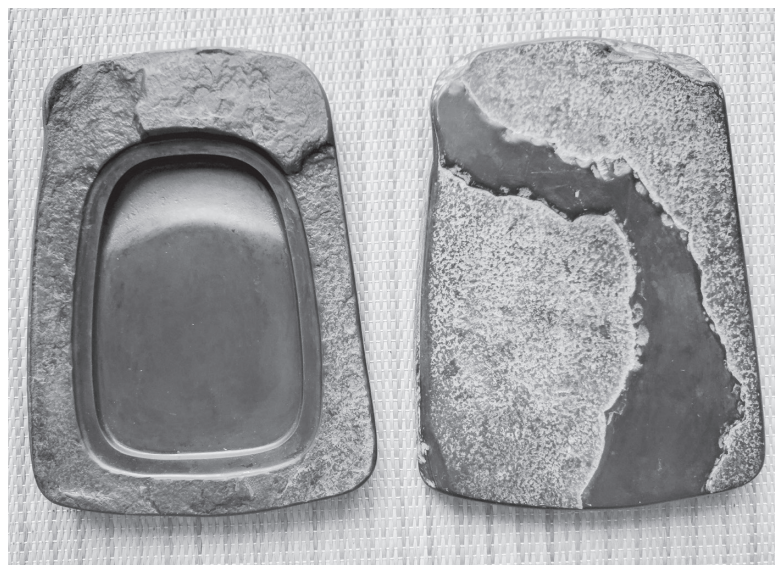


写真1 山河の流れを感じられる美しい若田硯

筆の里との縁

筆の里である広島県の熊野町とは思わぬところでご縁を頂いた。その縁は、広島を旅行中(昭和五十年代)の妹が私への土産に、筆の生産量日本一の熊野町まで足を運び「神技堂」を訪ねてくれたことから始まった。妹は幼少期のお稽古で使っていた筆に、神技堂の銘が入っていたのを覚えていたそうだ。

その後、神技堂のご主人は出張販売で上京する折には、私の小さなお稽古場にも立ち寄っ

作品Ⅰ 創刊当初から神技堂製の筆を用いている

仲秋

小五 仲川千秋

作品Ⅱ 「墨絵随想」(平成21年10月号)より
■釈文 一家に遊女もねたり萩と月 (松尾芭蕉)



作品Ⅲ 「書人物伝・顔真卿(三)」(平成23年6月号)で描いた麻姑



てくれるようになり、大小さまざまの筆を沢山並べ広島弁の楽しい話で弟子たちを喜ばせてくださったことなど、懐かしい思い出の一つである。また、月刊「書写書道」の「小学生規定毛筆(作品Ⅰ)」は花舞(馬尾脇・狸など)、「仮名有級・有段」は天平筆飛鳥(鼬)・三玉七鼬(猫・鼬)、「墨絵随想」(平成21年4月・平成22年3月)「書人物伝」(平成22年4月・平成24年3月)「仮名入門」の書画(作品Ⅱ・Ⅲ)は鶴舞(コリンスキー)※シベリア地方に生息する鼬・四端(鼬)・白玉一品(猫)、「選択毛筆課題(漢字・漢字仮名交じり書)」は春葉愛頑

(赤貂)・永昌(馬尾脇・羊)など、平成3年5月号の創刊号から三十五年、すべて神技堂製の筆で揮毫している(写真2)。

書を友として生きてきた長い年月を振り返ると、私は「文房四宝」に強いこだわりを持つこともなく、造詣を深めるための努力を特にすることもなく過ごしてしまったが、家族、弟子たちの心配りや巡り合わせのお陰でいつの間にか思い出の品を手元に残すことができた。このような幸せに感謝しながら、この文章を書き終える。



写真2 (左から)「花舞、天平筆飛鳥、三玉七鼬、鶴舞、四端、白玉一品、春葉愛頑、永昌」で本誌の課題などを揮毫している。